

映画「休暇」を観て

理事長 高見 優（社会福祉士）

久しぶりにいい映画を観た。吉村昭の原作を三十代の監督・脚本家・プロデューサーらが仕上げた秀作だ。

金田死刑囚（西島秀俊）が収容されている拘置所のベテラン刑務官平井（小林薫）は、独身の真面目な中年。夫と死別した子持ちの美香（大塚寧々）と結婚することになったが、休暇が取れないので新婚旅行はしないと決めていた。ところが披露宴の数日前、死刑執行の予定を知らされた平井は悩むのだ。誰もが嫌がる死刑囚のからだを支えて絶命させる職務を志願したら、一週間の特別休暇が付与されるという。打ち解けない六歳の息子に慣れてほしいと美香に言われていたから、ゆっくりできるチャンスかも…。

映画は、登場人物の心の襞(ひだ)を細やかに描いていく。金田のモノクロのスケッチと息子の子どものらしい色彩豊かな絵の対比。面会に来た妹と金田は一言も発しない、塀の外に出た妹が突然泣き出す。ふだんは温和な上司の主任刑務官（大杉漣）が、そんなにしてまでハネムーン休暇がほしいかと平井に掴みかかる。死刑執行と新婚旅行、絶望と希望、死と生、過去と未来、そして公と私…、それらは連続しているのだと言いたげだ。

執行の様子は、ここでは触れないほうがいだろう。披露宴に出席した同僚たちは豪華な料理を一口も食べられない。平井は新婚旅行中、執行の様子を思い出して気分が悪くなりトイレで嘔吐したり、夜中にうなされたりする。寝小便をした息子を抱きしめる平井の手にあの温もりが残っている感触が、観客の私にも伝わってくる。

金田がいかなる罪で死刑になったのか。「人は必ず変わる」～映画に拘置所長役で出演した元刑務官坂本敏夫の実体験に基づく言葉だ。一人の人間の命を多数の公務員の手で殺めさせること—それが死刑という名の国家による殺人＝死刑制度だ。その瞬間、私たちは「殺人犯」と同じ地位に引きずり下ろされる。大勢の手で死刑執行命令書に判子を押し冒頭のシーン、その手の一つは私たちのものに違いない。

折りしも五月から裁判員制度がスタートする。主権者である私たちは、この社会の出来事すべてに関係があるだけでなく、重要な政治権力（三権）の行使につき責務があるからだ。

裁判とは、犯罪事実の原因と責任の所在について明らかにしたうえで本人と関係者・社会がともに反省し、問題解決の道と今後の対策を探る場なのだ。「理解することは赦(ゆる)すこと。」ともあれ、命と暮らし・家族、社会などについて止めどなく思いが巡るこの映画を、多くの人に観てほしいと思った。